江角周子（スクールリーダーシップ開発専攻）

# きくこと

## 1. 教育を考える一言

「人間は他者の存在の欠落を経験するのではなくて、他者に対する他者としての自分自身の存在の欠如を経験する」　Laing, R. D. (1961)

## 2. 背景

Laing, R. D. (1927-1989) はイギリスの精神分析医であり、1961 年に精神病との関連のもとで検討される、自他のアイデンティティの補完性についての言及の中でこの言葉を残しています。私は、哲学者、倫理学者である鷲田清一（1999）がケアの問題に言及した本の中でこの言葉と出会いました。

## 3. 考察

鷲田（1999）は「聴く」という行為を、語る、諭すという、他者に働きかける行為ではなく、論じる、主張するという、他者を前にしての自己表出の行為でもなく、他者のことばを受け取る行為とし、「聴く」ことが、他者のなんらかの関心の宛先になっているという実感を与え、そのことがひとの存在証明になると論じています。つまり、聴き手をもたないとき、人は存在を失ってしまうのです。鷲田が「聴く」こと意味を問うなかで Laing, R. D. の言葉を引用したのは 1999 年ですが、この頃から指摘されるようになったのが、若者の「人間関係の希薄化」です。若者は相手が傷つかない、また自分が傷つかない程度の表面的な関わりを好むと指摘されてきています。

元々青年期はアイデンティティの形成が課題となる時期であり、精神的に不安定な時期であると考えられていますが、それと同時に、青年期は重要な他者が親から友人と変わる時期であるともされています。そのため、親しい友人との人間的な関わりのなかで互いに影響し合ってアイデンティティを形成していくと考えられますが、人間関係の希薄化が指摘される現代の若者にとって、アイデンティティの確立が難しくなりつつあるということが推測されます。現代の青年に対する、空虚感、かけがえのなさの感覚の欠如、自己肯定感の欠如、うつ等の指摘がこのことを表しているのではないでしょうか。

このように考えると、鷲田が Laing, R. D.を引用しつつ「聴く」ことの意味を強調したことは、教育にとっても意味があることだと考えられます。論じる、主張するということと同じく「聴く」ことにも意味があるのにも関わらず、これまで学校教育は、「聴く」ということに対して無頓着すぎたのではないでしょうか。子どもたちの「聴く」ことの素地には、幼い頃の重要な他者である親が多かれ少なかれ影響を与えているとは思いますが、それでも、どのような環境下で育ったのかに関わらず一定水準の「聴く」力が保障できるとすれば、それは学校教育ではないでしょうか。

文献情報

Laing, R. D. 『Self and Others』*Tavistock Publications*; London, 1961 年(レイン, R. D. (著) 志貴春彦・笠原嘉（訳)『自己と他者』みすず書房, 1975 年)

鷲田清一『「聴く」ことの力――臨床哲学試論』阪急 s コミュニケーションズ, 1999 年.